

## 清水幾太郎と戦後愛国心論争

——一九五〇年代を中心に——

竹 内 加 奈

はじめに

昭和二十（一九四五）年、敗戦を迎えると同時に日本はイデオロギーとしての「忠君愛国」から解放された。しかし、「愛国心」に関する問題は戦後決してタブー化されることはなく、寧ろ積極的に議論されるテーマであった。中でも社会学者である清水幾太郎が昭和二十五（一九五〇）年に著した『愛国心』は、彼の著作の中でも名著とされ今なお読み継がれている。

では、清水の説く愛国心論は、戦後日本とりわけ愛国心をめぐる論議が最も高まりを見せた一九五〇年代においていかなる特徴をもち、どのような意味をもったのか。

本稿では、戦後の愛国心論の流れと清水の愛国心論を比較・検討することで、戦後日本の愛国心論争にける清水の愛国心論の位置づけを行いたい。

## 第一章『愛国心』とその背景

## 第二節 一九五〇年代前後の愛国心論

先にもふれたように、戦後日本において愛国心論は決してタブーとされたわけではない。大熊信行は戦後の愛国心論を検討して、「少なくとも戦後のジャーナリズムと出版界について知るところをいえば、愛国心をテーマとすることが禁忌となったことなど全然ない。それどころか愛国心に関する議論がこの十七年間（一九四五年の敗戦から一九六二年まで）うんざりするほど山積している」<sup>(1)</sup>と述べている。

敗戦後、まずは左派の側からの愛国心論が説かれ始めた。昭和二十一（一九四六）年一月、ソ連と中国に亡命していた共産党の野坂参三が帰国、「民族戦線によって祖国の危機を救え」と題する講演を行って以降、愛国心論議は活発となっていく。左派のみならず様々な政治的立場から愛国とは何か、という問題が論じられたが、共通して彼等は「いつわりの愛国心や、誤れる愛国心にたいして、「真」の愛国心があるという考え方をとつた」<sup>(2)</sup>。古い愛国心を捨て、新しい愛国心に目覚めなければならぬという点に論調の一致があつたのである。

さらに昭和二十三（一九四八）年八月、雑誌『世界』上で「世代の差異をめぐって—進歩的思潮に批判と反批判—」<sup>(3)</sup>という座談会が開かれ、安倍能成が「日本の再建のためには、日本国民の中から出た—軍閥の命令とか官僚の拘束とかによらない—ほんとうの意味の愛国心が生まれなければならない」<sup>(4)</sup>と、愛国心を鼓吹した。ここで、安倍は理論的に愛国心を論じるのではなく、日本の再建のために真の愛国心が生まれなければならない、と説いたのである。この時期から、日本の再建という観点から愛国心が論じられていくこととなる。

そして、一九五〇年代に入り、愛国心論争は一層盛り上がりを見せた。「戦後の我が国では愛国心をめぐる論議は絶えることなく行われてきたが、中でも一九五〇年代はそれが最も高まった時代」<sup>(5)</sup>となる。この愛国心論の盛り上がり背景には、敗戦後の日本の置かれた状況の変化が存在していた。東西冷戦構造が固定化しつつある中で、一九四八年にアメリカは対日占領政策の重点を「非軍事化・民主化」から経済復興へと転換した。これは日本を「反共の防壁」とし、自由主義陣営の一員として取り込もうとするアメリカの思惑が働いたものであった。こうした中で、昭和二十五（一九五〇）年六月に朝鮮戦争が勃発する。GHQは日本政府に警察予備隊の創設を指令、同八月十日に日本政府は「警察予備隊令」を公布し、当時の第三次吉田内閣は早期講和と警察予備隊の設置を実現するために、独立心と愛国心の回復が必要であると繰り返し強調し、愛国心の涵養を推し進めていった<sup>(6)</sup>。この対日講和や警察予備隊設置の前提としての吉田内閣による愛国心の涵養の動きは、戦前の上からの愛国心の押しつけをリフレインさせるとともに、長期にわたる占領政策への反発や、占領軍の言論統制が次第に緩くなってきたことと相まって、愛国心論争を一層活発化させることとなった。

愛国心といえば、現在では右派の専売特許のように思われがちであるが、当時は左派が右派に負けないほど熱心に愛国を唱導しており、左右両陣営から愛国心が語られることに当時の愛国心論争の特徴があるといえよう。しばしば、両陣営の愛国心論は対立し衝突することもあった。しかし彼等の愛国心論は共通して、やはり戦中・戦前のものだった「新しい」愛国心とは何かというものであった。彼等の唱える愛国心は、「健全にして倫理的な愛国心」<sup>(7)</sup>「正しい祖国愛」<sup>(8)</sup>「愛国心ならぬ愛国心」<sup>(9)</sup>「自然に国民の間から生まれて来る愛国心、下からの愛国心」<sup>(10)</sup>「前進的な愛国心」<sup>(11)</sup>「静かなる愛国心」<sup>(12)</sup>といった「形容詞つきの愛国心」<sup>(13)</sup>だったのであり、「そのような愛国心論議のほとんどすべてが、新しい愛国心とは何かという問題に集中している」<sup>(14)</sup>た。これは、戦中・戦前の日本の愛国心への暗いイ

メージ、そして嫌悪の現れであり、敗戦後間もない時期における戦中・戦前の愛国心の在り方への反省や批判の表れでもあった。

## 第二節 清水幾太郎の愛国心論

こうした時代を背景として、清水幾太郎の『愛国心』は昭和二十五（一九五〇）年三月十日、岩波書店から刊行された。清水が愛国心について執筆の依頼を岩波の編集部から受けたのは『愛国心』刊行の前年一九四九年四月六日である。彼はこの依頼を受け「何とか書いてみよう」と編集部に回答したのだが、彼に愛国心について書くように腹を決めさせたのはある二つの事柄であったという。

そのひとつが吉田茂の「経済的愛国心」と「アカハタ」の「徳田書記長の愛国的大演説」という二つの新聞記事であった。清水は両者による愛国心という「殺し文句の奪ひ合ひ」<sup>158</sup>を見て、これらの愛国心は「民主主義の精神で貫かれた新しい愛国心」<sup>159</sup>では断じてなく、「大部分は戦争中と同じ意味の愛国」であって「さうであればこそ、この訴へは力を持ち得る」<sup>160</sup>と感じた。そして戦前の愛国心を受けついだ「危険な道具」を使えば「結果は同じく危険」<sup>161</sup>であって、「愛国心といふ道具は、使用されるより前に、民主主義の原則に照して、はつきりと批判されねばならぬ、使ふのはその後のことだ、私はさう信じた」<sup>162</sup>という。

そしてもう一つが、恒藤恭が『中部日本新聞』に寄稿した「民族主義の鼓吹に伴う危険性」という論稿である。このなかで恒藤は民族主義に基づく政治運動の合理性について言及し、「現在の日本の場合は、自ら不当不法の侵略戦争を計画し実行したために、民主的平和国家として更生するまで一時的に独立性を否定されてゐるものに外ならない」<sup>163</sup>と、日本における独立運動と世界諸地域において政治的独立のために闘っている民族とを同一視してはならな

いことを説いた。清水はこの恒藤の論稿が「私に大きな勇気を與へてくれた」<sup>22</sup>といい、「愛国心」を書こうと腹を決めたという。

清水にとって、愛国心を論じるということは、「勇氣」のいることであつた。これは愛国心が当時、いや今もなおという言葉のほうが正しいかもしれないが、「大変重要で避けて通れない課題であると同時に、扱い方が極めて難しく、敬遠したい問題だ」<sup>23</sup>からである。清水自身、「愛国心」において

愛国心という言葉は今も昔も特殊な感情的価値を持つているが、この後味の悪いところ、現在の吾々の地位と運命とが覗いている。(中略)吾々は口先で何と言うにしても、心の奥の何処かで日本を愛している。これは自然な気持と言つてよい。併し愛していればいるほど、現在の絶望的な状況に心を奪われるし、そこで積極的な態度に出ようとするとする途端に、過去に於ける愛国心の忌まわしい濫用という事実が記憶に蘇つて来る。率直な考え方も出来ない。(中略)元来愛国心などといふ特殊な感情的価値を伴う言葉に触れるのは、電流の通じている物体に手を触れるのと同じく、かなり危険である。この問題を論じている西洋の学者も、自分が真先に感情の擒になつてしまった例が多い。またこれに冷静な分析を加えたために非国民という非難を浴びせられた例も少なくない。<sup>24</sup>

と愛国心のもつ「後味の悪」さやそれを論じることの「危険」性について言及している。では清水はこの難問である愛国心に対してどのように向き合おうとしたのか。

この言葉（「愛国心」）は確かに吾々の心の急所に觸れる。国民心理の根本に刺激を與へる。併しこの言葉は如何にも後味が悪い。ハツとするけれども、その後、何か割り切れぬもの、宙ぶらりんのもの、滓のやうなものが残る。どんよりとしたものが心の底に澱んでゐる。<sup>24)</sup>

清水はこの日本人にとつて暗くどんよりとした何かをもたらず愛国心を、「実体的ではなく機能的に抱むことが大切だと思つてゐる」<sup>25)</sup>という。彼は、愛国心という問題を客観的かつ冷静に、つまり科学的に分析することを『愛国心』執筆の目的とした。そこで仮に定めた定義として清水は「愛国心とは、自分の国家を愛し、その發展を願ひ、これに奉仕しようとする態度であらう」<sup>26)</sup>、「近代になつて初めて民族は人間の生命を要求し得るやうな特殊な集団として完成された」<sup>27)</sup>が、「この民族国家へ向けられた愛情及び奉仕の態度、これが狭い意味に於ける愛国心といふものである」<sup>28)</sup>とした。

彼はこの定義に則りながら、愛国心の史的展開を科学的に記述していく。

その中で、清水はまず人間の集団への埋没欲求や排他性といった人間のもつ「原始性」への指摘を行う。集団と人間との間には「集団は人間の或る欲求を充足する機能を果すと同時に、人間は集団に自己の或る部分を吸収せられる」<sup>29)</sup>という相互関係が存在し、人間は本能的に集団に没入したいという欲求を持っている存在として描かれる。そしてこのように規定される人間が抱く愛国心について清水は、

既に読者が理解してゐるやうに、近代の、あるいは狭義の愛国心は、未開社会に於けるエスノセントリズムの後継者であり、その古い伝統に属してゐる。自己の集団のことは凡て優れてゐると信じ、この集団のメンバーだけ

が本当の人間であると思ひ、他の集団の人間及び風習を軽蔑嫌悪して、そのメンバーと相触れば直ちにこれを殺害するといふ、吾々の祖先の野蛮な態度が歴史の流れを潜り抜けて今日に残つてゐるのが愛国心といふものである。だが若し今日の愛国心が多少とも近代の文明人に相応しいものであるとすれば、近代の民主主義がこのエスノセントリズムに合理化を施して、その原始的な棘を抜き取つてゐるためである。この傲慢、偏狭、残忍を除く去乃至緩和してゐるためである。<sup>30)</sup>

とのべ、近代に至るに及んで発見された、民族、個人、そして世界、こういった要素が愛国心の偏狭で残忍な「原始性」を緩和、つまり合理化してきたと説いた。

しかし日本の愛国心は、民主主義、個人や世界といった「これ等のものを犠牲に供して発達してきた」<sup>31)</sup>のであり、結果として日本の愛国心は「孤忠」であり「非寛容」な「合理化されぬ愛国心」<sup>32)</sup>となつた。清水にとって、日本人の愛国心は「一つの呪詛」<sup>33)</sup>であり、主観的には美しく正しい愛国心であつても、客観的には愚劣で野蛮な愛国心にすぎないのである。

日本の愛国心の史的展開を以上のように述べた上で、彼はそれでも愛国者でいたいならば、と愛国者たる最低条件として①「同胞に対する素直な愛情」つまり天皇崇拜から「民衆への愛情及び奉仕」への転換<sup>34)</sup>、②意見を異にする相手を国賊や非国民として批判することをしない「寛容の精神」③「戦争が問題解決の方法たる意味を失つたこと」の「確認」<sup>35)</sup>を行い戦争と愛国心を切り離す④「民族国家が究極的意味を失ひつつあるといふ洞察」<sup>36)</sup>など四つの条件を挙げている。

こうして清水は、日本の「愛国心を実体的ではなく機能的に掴むこと」<sup>37)</sup>を試み、戦前とは違う「下からの愛国心」

の発展に期待したのである。

### 第三節 清水の『愛国心』に対する反応

清水はこのように愛国心の史的展開と愛国者たる条件について『愛国心』の中で述べたわけだが、彼はこの『愛国心』の刊行について「読者がこの文章を読む頃には、私の『愛国心』（岩波書店）といふ書物がもう世に出てゐるかも知れない。実は読者がこの小さい書物をどう受取ってくれるか、私はそれが心配で堪らないのである」、「情けないほどに心配」<sup>(38)</sup>と不思議なほどの不安を漏らしている。そして清水の不安は現実のものとなる。この著書の待ちうけていた運命は、左右両陣営からの批判の集中であった。

『愛国心』の刊行をうけて『日本図書新聞』では「清水幾太郎著『愛国心』を読んで」<sup>(39)</sup>という書評欄が設けられた。ここでは竹山道雄、井上清、西谷啓治、そして高島善哉の四人が清水の『愛国心』に対する書評を行っている。中でも高島は「相変わらず功妙で新鮮である」、「別にこれによつて国民の愛国心を駆り立てようとするものではない。だからこの書物は愛国心の構造を実に美事に描き出しているが、それから先のことは読む者の心ごころに任せてある。そこに氏の客観主義の面目があらわにされている」と一定の評価を与えた上で、「愛国心と階級意識の結びつきを外にして、具体的な愛国心の姿を考えることはできない。階級の問題を抜きにして、ただの一日でも今日の政治や経済の実態を掴むことができない」とは私たち社会学者の常識なのであるが、私は愛国心についても、この常識をもつと健全なものに仕上げてゆきたいと思う」と、清水が愛国心を論じる上で階級の問題に言及しなかったことを批判している。

また、西谷は「愛国心というものへ社会学的な立場から近付かれたという点に、一つの根本的な問題を感じず」と

して愛を社会学を用いて客観的に分析しようとした清水の姿勢そのものを批判した。そして清水が愛国心の条件を提示したことに對して、「いつたい条件付きの愛というものがあるであろうか。寧ろ、如何に原始的でもまず愛国心というものがあつて、それが同胞愛や寛容等を通して高められるか、或はそれが否定されるかであつて、まずミニマムの条件が立てられそれが充されれば愛が「合理化」されて成り立つということは、一種の取引にちかくならないであろうか」と哲学的な立場から苦言を呈している。

また、この書評のほかに、大熊信行は「日本の愛国心論争」において「清水氏は、終戦いらい、いかなる学者も企てえなかつた広さと深さにおいて、愛国心の分析と史的叙述をなしたのみならず、日本人が今日において、「若し秘かに愛国者であろうとするなら、これだけの条件が必要である」という最低条件をも提示したのであつた」<sup>(40)</sup>と清水の『愛国心』を高く評価した上で、「アジア諸民族のナシヨナリズムと民主主義との關係が、どういう形で發展し、そして日本民族自身の今後に予期されるナシヨナリズムはどういう運命のものか、ということとは重大な問題だが、清水氏は問題の一書において、そのような史的考察におよんではない」<sup>(41)</sup>とナシヨナリズムと愛国心の關係への考察の不足を指摘している。

このような中で、清水の『愛国心』に對して痛烈な批判を示したのが、竹内好であつた。

彼は初め「きつと学問の世界で革命を起こすか、それとも、私の思想なり生活なりを根本からたたきめすような、大問題が扱われているのかもしれない」と清水の『愛国心』に刊行に期待したという。しかし竹内は予想した「感動」は、得られなかつた。<sup>(42)</sup>そして竹内は

なるほど『愛国心』という書物をよめば、愛国心に関する多くの文献からの知識が「整理」されていて、たしか

に物知りにはなるが、私自身の肉（生命的なもの）にはならない。その整理は、主体を濾過しない外在的な区分だから、作者もそれを書くことよって自身を変革しないし、読者の側でも、論理に引きずり廻されて思考の秩序を内部から変えられることはない。いわば、なれあいの現状維持的な啓蒙者と被啓蒙者の関係であって、文学でいえば、そういう通俗小説になるわけだが、文学とちがって、学問の世界ではその通俗性が批判を免れているのである。<sup>(43)</sup>

と清水の「主体を濾過しない」整理によるこの『愛国心』は単なる知識の詰め込みに過ぎず、何の変革も起こり得ない「なれあいの現状維持的」なものであるとした。さらに竹内は、清水が執筆の依頼を受けて頭に浮かんだこと<sup>(44)</sup>がそのままの内容になっていることを指摘し、「つまり、清水の場合は、発想がすでに論証された結果と一致しているのであるから主体の内部対話は行わないわけであり、したがってそれを導くための論理は不用なわけであり、そのために作者と読者の共感の場も成り立たないわけだ」<sup>(45)</sup>と清水自身の内部対話の欠如を痛烈に批判した<sup>(46)</sup>。そして最後に、「こうしてみると、清水が「心配で堪らない」のが、日本人の愛国心についてでもなく、自身の学問についてでもなく、それとはまったく別の、おそらく世俗的な、あるものだという見当がつく」<sup>(47)</sup>と清水の心配が「世俗的」なものであると揶揄している。

清水の『愛国心』は、実に多くの反響を呼んだ著作であった。清水は戦後ふたたび左右両陣営が愛国心を標榜し、政争の道具として利用しようとする傾向に危機感を感じ、愛国心を客観的に考察するために『愛国心』を著した。この清水の『愛国心』は「愛国心という、感情的価値の電流を帯びて「美しい盲目の力」になり得るものを、極めて冷静な分析と検討の対象にした」<sup>(48)</sup>著作であった点で一定の評価されるものである。しかし、清水の全集をまとめた

清水禮子が「作品に対する著者の或る距離」、愛国心というテーマと「著者との心理的距離」を指摘しているように<sup>(49)</sup>、清水の愛国心に対する距離の取り方は、戦後の知識人の中では「特異」である。この点については、先にふれた竹内の書評においても痛烈に批判された点でもあった。

では、具体的に、清水と戦後知識人との愛国心論はどんな点が異なり、清水の『愛国心』にみられる客観性、その冷たさ、「心理的距離」とは何に由来するのであろう。

## 第二章「悔恨」と清水の愛国心論

### 第一節 進歩的知識人の特徴―丸山眞男

現在、愛国心の歴史的特質について樋口陽一は、土地や血のつながりに国民のアイデンティティを求める「エスニック（民族的）な愛国心」であり、もう一つは「自由な諸個人が取り結んで作った公共社会が国家だ」という考えの下で制度や理念制度や理念への愛着を感じる」ような「シビック（市民的）な愛国心」という分類を行っている<sup>(50)</sup>。この分類でいえば、戦後知識人の唱える愛国心論はその多くが「シビックな愛国心」であった。この「シビックな愛国心」の中にもさらに高島善哉をはじめとする左派の愛国心論と、丸山眞男や清水を代表とする進歩的知識人といわれるグループの愛国心論が存在する。一方「エスニックな愛国心」の中心は、和辻哲郎や安倍能成らオールドリベラリストたちであった。

しかし丸山ら進歩的知識人の唱える「シビックな愛国心」と清水の唱える愛国心は大きな相違点<sup>(51)</sup>がその根本に存在していた。それは自己の戦争に対する「悔恨」の問題である。

敗戦後の日本において愛国心論のほかにも「主体性」論や「近代」への評価など様々な議論が論壇で注目を集めていたが、「その背景にあったのは、弾圧の恐怖に屈して心ならずも転向し、あるいは戦争に抗議できなかったという知識人たちの悔恨であった」<sup>54)</sup>。

小熊英二は、戦後日本の思想を分析する中で、「便乗によって最後まで利益を得られたことく一部の者をのぞけば、多くの知識人にとって、戦争はまさに悪夢であった。それは、崇高な理念が表面的に賛美されていたのと裏腹に、恐怖と保身、疑心暗鬼と裏切り、幻滅と虚偽がないまぜになったものであった。他者への信頼と、自分自身の誇りが根こそぎにされるようなその体験は、しばしば屈辱感と自己嫌悪なしには回想できない、お互いに二度と触れたくない傷痕として封印された。だがこうした悔恨の記憶は、戦後思想における、重要な底流となつてゆくことになるのである」<sup>55)</sup>と、戦後思想における「悔恨の記憶」の存在を指摘しているが、この「悔恨」の思いは、戦後の知識人の思想と行動を考える上で見過ごせないものである。

そのもつとも具体的な例として戦後日本における進歩的知識人である丸山眞男があげられる。昭和十八（一九四三）年十月、文系大学生の学徒出陣が開始され、一九四四年に丸山自身も軍隊に召集されることとなった<sup>56)</sup>。丸山眞男は戦後、自己の軍隊生活についてほとんど述べることはなく、「わずかに、上官の意向をうかがう軍隊生活を「御殿女中」のようだったと座談会で述べたことがあったり、古兵に編上靴で殴られたというエピソードが伝聞で伝わっている程度である」<sup>57)</sup>。

しかしこの軍隊生活に限らず戦時中の体験は、丸山たち知識人たちに体制に抵抗することができなかつたという「悔恨」の念とそこから生まれる「自己批判」の思いを植え付けた。丸山自身「戦争直後の知識人に共通して流れていた感情は、それぞれの立場に於ける、またそれぞれの領域における『自己批判』です。いったい、知識人としての

これまでのあり方はあれでよかったのだろうか、何か過去の根本的な反省に立った新らしい出直しが必要なのではないか、という共通の感情が焦土の上にひろがりました」「私は妙な言葉ですが仮にこれを『悔恨共同体の形成』と名付けるのです」<sup>55)</sup>と自己の「悔恨」の念と「自己批判」の思いを語っている<sup>56)</sup>。そして鶴見俊輔が「われわれ戦後派は、前に屈辱があるわけで、戦後逆コースが来た時、今度こそ行為によって実証してやろう」<sup>57)</sup>と感じたように、戦中の記憶や後悔が戦後彼等を社会学の研究へ導いたのであった。

丸山は昭和二十六（一九五二）年の論文「日本におけるナショナリズム―その史的背景と展望―」において、ファシズムに至る近代日本のナショナリズムを分析し、明治以降の「自発的能動的な国民的連帯意識の成長に依存し」<sup>58)</sup>ない急速な上からの愛国心の養成は、「自我の感情的投射としての日本帝国の膨張はそのまま自我の拡大として熱狂的に支持され」<sup>59)</sup>たが、「なにより、国家意識が伝統的社会意識の克服ではなく、その組織的動員によって注入された結果は、しばしば指摘されるように、政治的責任の主體的な担い手としての近代的公民のかわりに、万事を「お上」にあずけて、選択の方向をひたすら権威の決断にすぎる忠実だが卑屈な従僕を大量に生産する結果となった」<sup>60)</sup>と主体性のない国民の存在を指摘している。こういった「無責任」な態度に対して「主体性」を追求する態度は、まさしく丸山の「戦時期の悔恨に立ち向かう主体性」<sup>61)</sup>への思いの発露であった。

丸山のみならず多くの戦後活躍した進歩的知識人は、戦争体験からくる「悔恨」の念を胸に戦後知識人という立場から発言をした。彼らの発言には、戦前の自己の態度に対する批判の思いが強く込められていたのである。

## 第二節 清水と「悔恨」

しかし清水には、戦時中の行動に対する「悔恨」がほとんど存在しなかった。戦前からフリーのジャーナリストと

して活動していた清水は戦中、読売新聞の論説委員として戦争支持ともとれる論説を数多く残している。それなのに、なぜ彼は「悔恨」の念が少ないのであろう。

それは彼が敗戦時に三十八歳であったという世代の相違であり、戦時中の徴兵を始めたとした動員の体験及びその恐怖を知らないことも関係している<sup>62)</sup>。清水は丸山のように軍隊経験をしたわけではないし、その軍隊生活のなかで庶民を客観的に観察する機会もなかった。清水自身、戦争の体験よりも、大正十二（一九二三）年に起った関東大震災のほうか、はるかに重い体験だったと述べており<sup>63)</sup>、このとき「私は、一生のうちで最も大きな経験にぶつかることになった」<sup>64)</sup>という。実際清水は、関東大震災で家を失い、家の下敷きになりながらも命からがら生き延びたのであり、この地震で完全な無一物となった清水一家は貧困に追い込まれるという辛い少年時代を過ごした経験を持った。

また、清水は丸山たちが重視する戦争に対する責任意識も薄かった。「戦後知識人が自己の戦争責任の問題にこだわった理由の一つは、自分が国家の運命を多少とも左右できたはずだという責任感からであった」<sup>65)</sup>が、清水は

誰も彼も、あの戦争を防ぎ止めなかったのは、自分たちの責任である、と言うようになった。何かの機会に、私も言ったような気がする。けれども、少し落ち着いて考えてみると、責任という観念は、その責任を負う人間に対する制裁が定められている場合にだけ意味があるように思う。（中略）そういう制裁が定められていない場合、自分の責任を認めることは誰にでも気軽に出来ることであるし、また、認めたところで、其処から社会的な実益が生まれるわけではない。しかし、社会的な実益ではないが、当人の個人的な実益は生まれるかも知れぬ。自分の責任を認める人間は、自分が良心的な人間であることを人々に知らせることが出来るであろうし、また、自分の行動の如何によって歴史の流れを変え得る大物であることを人々に知らせることが出来るであろう。しかし、

明らかな制裁が定められていない場合、謂わば安全地帯で、自分の責任について雄弁に語るのは、あまり高尚な行為とは言えないであろう。<sup>66)</sup>

と、簡単に自己の戦争責任を論じる姿勢を批判している。

このように戦争に対する自己の「悔恨」が薄い清水にとって、愛国心という「感情的価値」<sup>67)</sup>を持つ「一つの呪詛」<sup>68)</sup>を客観的に扱うことは、丸山を初めとする進歩的知識人たちよりも比較的容易であったことは察しがつく。清水にとって愛国心の問題は、「戦前及び戦中の愛国心の実体化の傾向が批判されぬままに、払拭されぬままに、戦後の日本の政治の上に生き延びて、再び同じ失敗を繰り返す危険が看取されたから」<sup>69)</sup>こそ論じるべきものであったのであった。そもそも清水が愛国心を書くに至った経緯も、あくまで岩波書店からの依頼という外的要因がはじまりであり、愛国心論を論じること、そのこと自体が自身の戦中の行動に対する「悔恨」と結びついたわけではなかったのである。

こうした清水の姿勢は、竹内好にとっては「主体を濾過しない外在的な区分」によって整理された「主体の内部対話」の欠如した愛国心論として映った。戦前日米開戦を支持した過去に対して「すべての言語表現は自分の血肉とも」にあり、その責任は一生つきまとう<sup>70)</sup>と自己の戦争責任を隠蔽することに批判的であった竹内にとって、愛国心は清水のように割り切った態度で考察できる対象ではなかったのである。

しかし、逆に戦争に対する「悔恨」の念が薄いからこそ、清水は主観的で、熱っぽくなりがちな愛国心というものと距離を保つことができ、かつ客観的に科学的に考察することが可能であった。現在のところ、愛国心を科学的に分析した学問的概説書は、清水の『愛国心』が唯一のものである。

## おわりに

清水幾太郎は、日本の「一つの呪詛」と言うべき愛国心を客観的、具体的、かつ冷静に論じることが可能であった数少ない戦後知識人であった。しかし彼のこの客観性は、自己の戦争に対する「悔恨」の少なさをゆえに可能となったものであった。丸山眞男ら戦後進歩的知識人たちのように戦中の自己の態度に対して「悔恨」の念が少ない清水は、日本人にとって「心の急所に觸れる」「後味が悪い」「どんよりとした」ものであり、そして興奮と困惑をもたらすその愛国心という言葉を、自己から切り離れた科学のもとで、実体的ではなく機能的に掴むことを可能とした。

一九五〇年代は、清水をはじめとして実に多くの愛国心論が世に出た。しかし「一九六〇年代以降日本が高度経済成長の時代に入ると、時々思い出したように愛国心が強調されることがあっても」、このときほど熱心な愛国心論争に発展することはなく「愛国心論は明らかに表舞台から姿を消して」いったのであった<sup>(7)</sup>。清水の「悔恨」の薄さは別の機会に更に論じる必要があるが、彼の著作『愛国心』は、この愛国心論が最も盛り上がった時期に出版されて以降現在に至るまで、科学的な手法で愛国心を論じた唯一の学問的概説書の資格を得たものであり、その功績は一定の評価を得るものである。

## 註

- (1) 大熊信行（一九六二）「愛国心―展望と問題点」『文部時報』十一月号三頁。
- (2) 大熊信行（一九五二）「日本の愛国心論争」、『理想』、四四頁。
- (3) 『世界』一九四八年八月三十二号掲載。

- 参加者は清水幾太郎、安倍能成、天野貞祐、和辻哲郎、磯田進、松村一人、高桑純夫、都留重人などオールドリベラリストからマルクス主義者も含む。
- (4) 「世代の差異をめぐって—進歩的思潮に批判と反批判—」『世界』一九四八年八月三十二号、市川昭午監修・編集、貝塚茂樹・藤田祐介編集(二〇〇八)『資料で読む戦後日本と愛国心 第一巻 一九四五—一九六〇』六三頁。
- (5) 市川昭午(二〇一一)『愛国心 国家・国民・教育をめぐって』学術出版会、一四頁。
- (6) 吉田茂は施政方針演説(一九五〇年七月一四日)で
- 「終戦以来、占領下すでに五年を経過いたしましたして、やや国民の独立心、愛国心がいささか阻喪するに至つたのではないかと感じられる節あることはまことに憂うべき次第であると考えらるるのであります。独立心、愛国心のなき国民が国際間において尊重せらるはずはないのであります。」(市川昭午監修・編集、貝塚茂樹・藤田祐介編集(二〇〇八)『資料で読む戦後日本と愛国心 第一巻 一九四五—一九六〇』五四八頁(以下市川資料集①))
- と愛国心の重要性について説いている。
- (7) 白井二尚(一九五二)『愛国心』創文社編集部編『新倫理講座第五巻 世界と国家』創文社、(市川資料集①、二九〇頁)
- (8) 上原専祿(一九五二)『祖国愛と平和』『道徳教育』第一巻第五号(市川資料集①、二七八頁)
- (9) 梅根悟(一九五三)『愛国心工作と生活教育』『カリキュラム』第五八号(市川資料集①、三〇八頁)
- (10) 清水幾太郎(一九五三)『愛国心について』『婦人公論』第三九卷第二号、一三〇頁。
- (11) 日高六郎(一九五四)下中弥三郎編『教育学事典 第一巻』平凡社、三頁。
- (12) 一九五一年二月十二日第十回国会衆議院予算委員会(市川資料集①、五七〇頁)
- (13) 市川昭午(二〇一一)『愛国心 国家・国民・教育をめぐって』学術出版会、二五頁。
- (14) 大熊信行(一九六二)『愛国心—展望と問題点—』『文部時報』一九六二年一月号、三頁。
- (15) 清水幾太郎(一九五〇)『愛国心』前後』『図書』一月号一三頁。
- (16) 同右
- (17) 同右
- (18) 同右
- (19) 同右

- (20) 恒藤恭「民族主義の鼓吹に伴う危険性」『中部日本新聞』昭和二十四年五月二十三日。
- (21) 清水（一九五〇）前掲論文一三頁。
- (22) 市川前掲著書八三頁。
- (23) 清水幾太郎（一九五〇）『愛国心』、清水禮子編『清水幾太郎集第8巻』（講談社、一九九二年）二六頁。（以下清水全集8）。
- 今回清水の『愛国心』は、清水禮子編『清水幾太郎集第8巻』（講談社、一九九二年）より引用。以下ページ数は著作集のページ数。
- (24) 清水『愛国心』一五頁。
- (25) 清水幾太郎（一九五三）『愛国心について』『婦人公論』、一二六頁。
- (26) 清水『愛国心』一八頁。
- (27) 清水『愛国心』四八頁。
- (28) 清水『愛国心』四七頁。
- (29) 清水『愛国心』二五頁。
- (30) 清水『愛国心』六五頁。
- (31) 清水『愛国心』八〇頁。
- (32) 清水『愛国心』八九頁。
- (33) 清水『愛国心』一〇八頁。
- (34) 清水『愛国心』一一八頁。
- (35) 清水『愛国心』一二〇頁。
- (36) 清水『愛国心』一二二頁。
- (37) 清水（一九五三）前掲論文、一二六頁。
- (38) 清水（一九五〇）前掲論文一二頁。
- (39) 『日本図書新聞』一九五〇年四月二二日掲載。以下の引用はこの記事からの引用である。
- (40) 大熊信行（一九五二）『日本の愛国心論争』、『理想』二二四号、五十二・五三頁。
- (41) 同右五三頁。

- (42) 竹内好『竹内好全集12』（以下竹内全集12）、筑摩書房、一九八一年、一七七頁。
- (43) 竹内全集12 一七七・一七八頁。
- (44) 清水は岩波の編集部から愛国心について論考を依頼された際、三十秒位の時間で以下の観念が頭に浮かんだとする。（清水『愛国心』前後）一三頁）
- ① 「愛国心といふのは、原始人のエスノセントリズム即ち民族中心思想の流れを継ぐものである」
- ② 「近代の先進諸国ではそれが民主主義によつて合理化されてゐる」
- ③ 「併しそれでも原始的な棘が残つてゐて、愛国心といふ言葉は往々危険な殺し文句として使用される」
- ④ 「愛国心とイントランス即ち非寛容との関係」
- ⑤ 「日本人の愛国心とは近代的合理化以前の代物である」
- ⑥ 「愛国心と縁の深かつた戦争はもう時代遅れだ」
- ⑦ 「抑々愛国心の向ふ民族国家たつて時代遅れかも知れない」
- (45) 竹内全集12、一七九頁。
- (46) ほかに竹内は、忠君愛国から「愛国」を分離しようとする清水に対して、
- 「民主主義による合理化を経っていない」という日本の愛国心についての清水の「説教から実践的モメントをつかみうるのは架空な自由人だけ」
- 「家族主義を中核とする日本の社会構造を不問に附したままで清水の説く理想的愛国者になるわけにはいかぬだろうと  
思う。」
- と批判している。
- (47) 竹内全集12、一八〇頁。
- (48) 清水全集8、清水禮子「解題」三九六頁。
- (49) 同右三九六・三九七頁。
- (50) 樋口陽一（二〇〇七）「歴史と向き合う〈第六部愛国心再考①〉」『朝日新聞』二〇〇七年二月二十五日所載。
- (51) 小熊英二（二〇〇三）『清水幾太郎―ある戦後知識人の軌跡―』御茶の水書房、三二頁。
- (52) 小熊英二（二〇〇二）『「民主」と「愛国」戦後日本のナショナリズムと公共性』五〇頁。

- (53) 丸山は入営後に朝鮮に駐屯、病気になって除隊された。病氣療養を経て再び召集され、広島陸軍船舶司令部に送られたが、そこで原子爆弾に被爆、その後生還する。
- (54) 小熊前掲(二〇〇二)『民主』と『愛国』戦後日本のナショナリズムと公共性』五五頁。
- (55) 丸山眞男「近代日本の知識人」『後衛の位置から』未来社、一九八二年、一一四・一一五頁。
- (56) この「悔恨」は被害者意識と密接な関係があることを指摘しておく必要がある。
- (57) 丸山は一九六八年の座談会で、軍部の支配に抵抗できなかったという悔恨はあったものの、「自分個人として戦争責任があるとはまず思っていないかった」(久野収・丸山眞男・吉野源三郎・石田雄・坂本義和・日高六郎・緑川亨(一九六八)『平和問題談話会』について)『世界』一九八五年七月臨時増刊号三七頁)と述べており、丸山らのいう「悔恨」とは戦争を阻止できなかったという結果よりも、自分たちの戦時中の身の処し方の問題であり、戦争に抗議できなかったという強い思いの表れである。
- (58) 久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』岩波書店、一九五九年、一三四頁。
- (59) 丸山眞男(一九五二)『日本におけるナショナリズム』『丸山眞男集5』岩波書店、六八頁。
- (60) 同右六九頁。
- (61) 小熊前掲(二〇〇三)三二・三三頁。
- (62) 清水は昭和十七年徴用され、ビルマに派遣され『陣中新聞』の編集を任されている。そこで高見順や豊田三郎と共に活動していた。
- (63) 清水幾太郎(一九八六)『政治との距離』『思想の科学』一九六八年八月、一一〇頁。
- (64) 清水幾太郎(一九七五)『わが人生の断片』『清水幾太郎著作集14』(一九九二年)所収、講談社、一七五頁。
- (65) 小熊前掲(二〇〇三)三一頁。
- (66) 清水前掲著書(一九七五)一七頁。
- (67) 清水『愛国心』一三頁。
- (68) 清水『愛国心』一〇八頁。
- (69) 清水前掲(一九五三)一二九頁。

- (71) (70) 竹内好『竹内好全集11』筑摩書房、一九八〇—一九八一年、一五七頁。  
出原政雄(二〇〇八)「愛国心—知的伝統の再発見」、出原政雄編(二〇〇八)『歴史・思想からみた現代政治』法律文化社所収、五六頁。